石ツミ遺跡第２次発掘調査報告書

2018

姫路市教育委員会

序

姫路市内には約 1,200 箇所の遺跡が存在します。遺跡は私たちの祖先が残した国民の共有財産であるとともに、地域の歴史を正しく理解する上でかけがえのない貴重な資料でもあります。姫路市教育委員会では、これらの遺跡を保護し未来に継承するため、発掘調査を進めるとともに、現地説明会や企画展等を通じて、その成果を市民の皆様に広く周知するよう努めております。

石ツミ遺跡は平成 25 年度の調査で発見された遺跡ですが、詳しい時期・内容はこれまで不明でした。今回の調査において、弥生時代中期に属す円形周溝墓、竪穴建物跡などの遺構が発見され、集落遺跡としての一端が初めて把握されました。限られた範囲の調査ではありますが、居住域と墓域が意識されていた可能性がうかがえるなど、遺跡の実態を解明する上で、多くの新たな知見を得ることができました。

ここに調査成果を報告し、今後の調査・研究の進展に資する所存です。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり多大なご協力を賜りました事業者様をはじめ関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

平成 30 年（2018 年）3 月

姫路市教育委員会

教育長　中杉　隆夫

例言・凡例

1．本書は、姫路市西庄字石ツミ甲 367 番 1 他において実施した石ツミ遺跡の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、事業者から委託を受け姫路市教育委員会が実施した。現地調査は、姫路市埋蔵文化財センターの小柴治子、中川猛、福井優、南憲和、玉越綾子が担当した。整理作業は、小柴、福井、南が担当した。報告書の執筆・編集は南の責任で行った。
3．発掘調査に関する写真・図面等の記録及び出土品は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
4．本書で使用した座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標系Ⅴ系であり、方位は座標北を示す。標高値は、東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした。
5．土層図の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』に準拠した。
6．遺構は、原則としてアルファベットと数字を組み合わせた略号で表記した。略号は SI- 竪穴建物跡、SK- 土坑、SD- 溝、ST- 墓、SP- 柱穴（ピット）をあらわす。

目次

第１章　はじめに
　第１節　調査に至る経緯・経過 ・・・・・・・・・・ 1
　第２節　調査地周辺の地理的環境及び既往調査 ・・・・・・・・・・ 1
第２章　調査の成果
　第１節　調査の概要 ・・・・・・・・・・ 2
　第２節　遺構・遺物 ・・・・・・・・・・ 2
第３章　総括 ・・・・・・・・・・ 8

挿図目次

図１　石ツミ遺跡周辺等高線図
図２　確認調査区土層断面図
図３　遺物実測図（1）

図版目次

図版１　石ツミ遺跡と周辺遺跡／調査区・既往調査位置図
図版２　遺構全体図
図版３　５区西壁（a-a´）土層断面図
　　　　４区西壁（b-b´）土層断面図
図版４　SI02 平面図　SI02 関連遺構断面図
図版５　SI02・柱穴列（SI02SP01-SI02SP10）断面図
図版６　SI03 平面・断面図
図版７　SI04 平面・断面図　SI04 関連遺構断面図／
　　　　13 区平面・断面図／
　　　　８区平面・断面図　SD29-1 断面図
図版８　４区拡張区①・42 ～ 49 区平面図
　　　　SD08・SD26・SD27・SD28 断面図
図版９　４区拡張区平面図②
　　　　SD01・SD03・SD09・SD10・SD30 断面図
図版 10　ST01 ～ ST07 平面・断面図
図版 11　遺物実測図（2 ～ 12）
図版 12　遺物実測図（13 ～ 17）
図版 13　遺物実測図（18 ～ 35）
図版 14　遺物実測図（36 ～ 39）／遺物観察表
図版 15　遺構写真（１）
図版 16　遺構写真（２）
図版 17　遺構写真（３）
図版 18　遺構写真（４）
図版 19　遺構写真（５）
図版 20　遺構写真（６）
図版 21　出土遺物写真

第１章 はじめに

第１節　調査に至る経緯・経過

姫路市西庄字石ツミ甲367番1他において建築工事が計画された。計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地である石ツミ遺跡(県遺跡番号020946)に近接することから、事業者の依頼を受けて平成28年11月29日に試掘調査(調査番号:20160392)を実施したところ、竪穴建物跡・ピット等の遺構が検出され、弥生土器等の遺物が出土した。これを受けた協議の結果、事業者の協力を得て工事範囲を対象に本発掘調査を実施することとなり、平成29年４月20日に事業者と「姫路市西庄字石ツミ甲367番1他の開発に伴う埋蔵文化財(石ツミ遺跡)発掘調査委託契約書」を締結した。本発掘調査は、確認調査を行った上で対象範囲を確定し最終的に664㎡の調査を行った。現地調査(調査番号:20170037)に要した期間は、平成29年４月25日から７月31日であった。現地調査終了後、整理作業及び発掘調査報告書の作成を行い、本書の刊行をもって事業を完了した。本発掘調査開始から整理作業終了までの体制は以下のとおりである。

姫路市教育委員会
　教 育 長　　中杉隆夫
　教育次長　　名村哲哉
生涯学習部
　部　　長　　岡田俊勝
文化財課
　課　　長　　花幡和宏
　課長補佐　　大谷輝彦（調整）
　技　　師　　黒田祐介（調整）

埋蔵文化財センター
　館　　長　　前田光則
　課長補佐　　岡崎政俊（庶務）
　係　　長　　森　恒裕（調整）
　技術主任　　小柴治子（調査・整理）
　　中川　猛（調査）
　　福井　優（調査・整理）
　　南　憲和（調査・整理）
　主　　事　　岡本武平（庶務）
　嘱託職員　　玉越綾子（調査）

第２節　調査地周辺の地理的環境及び既往調査

石ツミ遺跡は姫路平野南部を流れる大井川と水尾川に挟まれた沖積地に位置する(図版１)。周辺には水尾川に沿って土山遺跡(３)、町田遺跡(４)、八反長遺跡(５)、堂田遺跡(６)等の遺跡が点在する。このうち八反長遺跡(弥生時代・集落跡)と堂田遺跡(縄文時代・散布地)は水尾川の改修工事に伴って兵庫県教育委員会により発掘調査が実施され、その成果が公表されている。八反長遺跡では弥生時代中期初頭の溝のほか、同後期の土坑墓と弥生時代末から古墳時代初頭の方形周溝墓状の遺構が各１基検出され、さらに旧河道からは奈良時代後半から平安時代前半に属すとみられる木器類が多数出土している。堂田遺跡では旧河道から縄文時代晩期前半の土器・石器等が出土している(註１)。また、調査地の東約500ｍ付近では新幹線建設に伴い発掘調査が行われ、沼状遺構などが発見されるとともに弥生時代前期末から中期初頭の土器が出土している(註２)。

石ツミ遺跡は北西から南東に下降する緩傾斜地に立地する(図版１)。『堂田・八反長遺跡発掘調査報告』によると遺跡の南側(T.P. 10.0ｍ付近)に旧河道が南東に流れていたとされる(註３)。昭和43年調製の地形図をもとに等高線図(図１)を作成したところ、調査地の北東部ではT.P. 10.6～11.0ｍの等高線が北西側にやや湾曲しており、埋没谷や旧河道等が存在する可能性も考えられた。

石ツミ遺跡は平成25年に発見された。本発掘調査(１次調査)の結果、南から北に緩やかに下降する黄色粘質土の基盤層(T.P. 10.4ｍ)の上面で、木棺墓２基、溝(流路)１条、弥生時代前期末から中期初頭の土坑等を検出した(註４)。また、今回の調査で事業地北部の遺構の状況を把握する目的で行った確認調査では、4箇所全ての調査区で湿地性堆積土とみられるオリーブ黒色粘質土が確認された(図２)。

以上の成果から、遺跡の北部は微高地の縁辺部に該当し、その中心は南部にあると推測された。

註1　兵庫県教育委員会『安田・八反長遺跡発掘調査報告』兵庫県文化財調査報告 108 冊 1992年、松本正信「八反長遺跡」『姫路市史 第7巻下 資料編 考古』姫路市 2010年、加藤史郎「安田遺跡」『姫路市史 第7巻下 資料編 考古』姫路市 2010年

註2　松本正信「西庄遺跡」『姫路市史 第7巻下 資料編 考古』姫路市 2010年

註3　兵庫県教育委員会『安田・八反長遺跡発掘調査報告』兵庫県文化財調査報告 108 冊 1992年

註4　姫路市教育委員会『石ツミ遺跡第1次発掘調査報告書』姫路市埋蔵文化財調査報告 14 集 2013年

第２章　調査の成果

第１節　調査の概要

本発掘調査は建物基礎等により遺跡が影響を受ける部分を対象とした。調査区は調査地の外周に沿って北西から１～４区、１区から北に延伸した調査区を５区とし、中央部の調査区を６～49区と呼称した(図版２)。

調査地の基本層序は耕土(約20cm)・暗灰黄色土(旧耕土・約５cm)を経て黄橙色シルト質粘土の基盤層(T.P10.4～10.6m)に達する。遺構は基盤層上面で検出した。４区北部及び５区北部では基盤層が緩やかに北に下降し、微高地の縁辺部に至ることが確認された(図版３)。検出した遺構は、竪穴建物跡７棟、土坑39基、円形周溝墓１基、周溝墓３基、溝32条、木棺墓７基、柱穴(ピット)400基以上を数える(図版２)。

第２節　遺構・遺物

遺構の分布状況をみると調査地の北西部(１区・２区北部・６区の周辺)では希薄であった。この要因としては、後世の耕作等により削平を受け遺構が滅失した可能性が高いと考えられる（図版２)。

遺構は調査範囲の制約から全体の規模・形状等が不明なものが多いため、主要なもののみ時代別に記述する。

１．縄文時代

遺構は検出されなかったが、遺物は15区の基盤層直上で縄文時代後期の深鉢(図３－１)、SD08 から弥生土器に混じって突帯文土器の

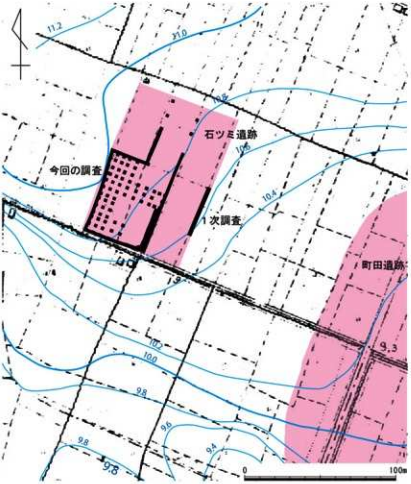


図1　石ツミ遺跡周辺等高線図（S=1：2,500）

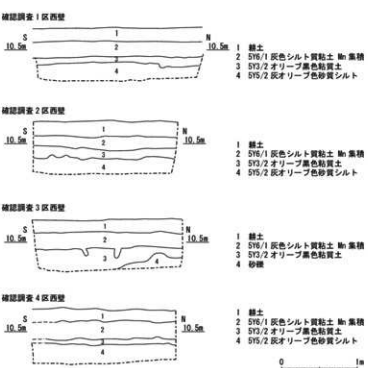


図２　確認調査区土層断面図（S=1：50）

深鉢(図版13-23)が出土した。1は平口縁をもつ粗製の深鉢で、口縁端部が内側に屈曲する。縄文は施文されず内外面に巻具条痕が顕著にみられる。元住吉山式(縄文時代後期後半)に属すとみられる。23は口縁端部からやや下がった位置に断面三角形の突帯を貼り付け、突帯上に刻み目をもつ。船橋式(縄文時代晩期後半)に属すとみられる(註5)。

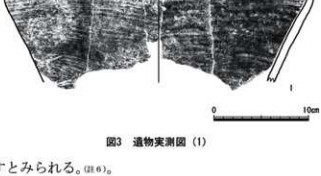


図3　遺物実測図（1）

2．弥生時代

出土土器から検出した遺構の大半は弥生時代に属すとみられる。(註6)。

（1）竪穴建物跡

SI02(図版4・5・11・17・21)　2区中央部で円形の竪穴建物跡を4棟（SI02-1～4）重複して検出した。西側約1/3及び中央部東半は調査区外に広がる。周壁溝及び燃焼施設の切合い等から SI02-4・SI02-3→SI02-2→SI02-1 の順に新しくなるとみられるため、位置を少しずつ北にずらしながら建て替えられた可能性が高い。SI02-1は時期不明の掘立柱の柱穴列（SI02SP1-03-05-09-10）に切られる。検出面から床面までの深さは約5㎝を測る。26・28区では貼床が確認された。遺物は、SI02-3の周壁溝上から甕の底部（図版11－2）、同周壁溝付近から暗緑色を呈す碧玉製管玉（図版11－6）、サヌカイト製の石鏃が出土した。

SI02-1　SI02-1SK01、SI02SK01、SK40を切る。直径7.80～7.96mを測り、床面積は約48.7㎡に復元される。床面では焼土とともに垂木等の炭化材が放射状に検出された(図版17)。SI02SP20・07・23は主柱穴とみられ、芯々距離で2.3m－2.1mの間隔で配置される。燃焼施設は調査区外に位置すると想定される。時期は、SI02-1SK01、SK40を切ることから、中期(Ⅲ期)以降と考えられる。

SI02-2　SI02-1SK01、SI02SK03、SI02-3の周壁溝、SI02SP38を切る。SI02-1とは直接切り合わないが、SI02-1床面の炭化材がSI02-2の周壁溝を越えて広がるため、SI02-1より先行すると考えられる。直径6.77～7.09mを測り、床面積は約37.7㎡に復元される。SI02SP04・39・36は主柱穴とみられ、芯々距離で2.45m－2.38mを測る。燃焼施設は調査区外に位置すると想定される。

SI02-3　直径6.84～7.20mを測る。SI02SP38は位置的に主柱穴の可能性がある。SI02SK02は中央土坑とみられ、長軸約1.15m、短軸80cmの楕円形を呈す(図版17)。床面から底までの深さは50cmを測り、下層に多量の炭を含んでいた。SI02SK02の2層から壺の底部（図版11－3）、無頸壺（4）が出土した。4は球形の体部をもち直口するもので、口縁端部は角張る。

SI02-4　直径2.96m前後を測る。SI02SK03は位置的に中央土坑とみられ、長軸65㎝、短軸50㎝以上の楕円形を呈すと思われる(図版17)。床面からの深さは35㎝を測り、底には炭層が厚さ約5㎝にわたって存在した。上層から甕の底部(図版11－5)が出土した。

SI03(図版6・11・18・21)　2区南部に位置する。円形又は多角形の竪穴建物跡で東端部及び西半は調査区外に広がる。直径5.52～5.80mに復元され、検出面から床面までの深さは約5㎝を測る。SI03SP08・03・04は主柱穴とみられる。SI03SK01は燃焼施設である。長軸83㎝、短軸49㎝以上を測り楕円形を呈すと思われる。南北に小溝が2条付随し、北側の溝は屈曲して西側の調査区外に続く。SI03SK01付近から北側の壁際まで厚さ約5㎝の貼床が確認された。貼床の下部は不定形に3㎝程度掘りくぼめており、床面の構築に伴い何らかの地業が行われた可能性も考えられる。遺物は、SI03SP03－04を結ぶライン付近から淡緑色を呈す碧玉製管玉(図版11－7)が出土した。土器は細片のみで詳細な時期は不明である。

SI04(図版7・18)　2区南端部に位置する。隅丸長方形を呈す小型の竪穴建物跡で、規模は長辺3.30m、短辺2.32m、床面積は約7.7㎡に復元される。検出面から床面(地山面)までの深さは約5㎝を測る。中央部

のやや南西寄りに中央土坑SI04SK01が位置する。SI04SK01は直径37cm前後の円形で深さは８cm程度を測り、底及び側面の一部は被熱により赤変していた。西側に浅い小溝が短く取り付く。SI04SK01周縁は地山の削り残しにより僅かに土手状に盛り上がり、その外側には炭粒が広がっていた。SI04SK01を挟んで小ピット(SI04SP02・03)が検出された。径15～27cm、深さは５～13cmを測るがSI04に伴うものか不明である。遺物は流紋岩製の打製石庖丁が出土した。土器は細片のみで時期は不明である。

SI05(図版７)　13区で竪穴建物跡の南西端を検出した。全体の形状は不明である。検出面から床面(地山面)までの深さは約８cmを測る。床面の一部に焼土・炭化材がみられた。土器は小片が出土したのみで、詳しい時期は不明である。

SD29(図版７・18)　８区で*イチマル*土坑(SD29-1)を検出した(註7)。竪穴建物跡のプランは後世の削平等により消滅している可能性がある。*イチ*土坑は長軸1.2m以上、短軸0.26m、検出面からの深さ20cmを測り、*マル*土坑は*イチ*土坑の西に位置し直径0.7m前後、深さ20cmを測る。周辺は被熱により赤変していた。両土坑の間には深さ13cmの溝が取り付く。*イチ*土坑の北端からは浅い溝(SD29-2)が北東に延びていた。周縁部に土手は確認されなかった。出土遺物は少量のため、詳しい時期は不明である。このような形態は、清水遺跡(たつの市)(註8)、六角遺跡(姫路市)(註9)の弥生時代中期(Ⅳ期)の竪穴建物跡に伴うタイプと同類とみられる(註10)。

（２）土坑

SI02-1SK01(図版４・11・21)　SI02-1、SI02-2のそれぞれの周壁溝に切られる。幅1.7m、延長3.0m以上、検出面からの深さ35～55cmを測り、溝状に延び西端は調査区外に続く。遺物は広口壺(図版11－８)、砥石(９)が出土した。８は口縁部が「へ」の字状に垂下し下端部は肥厚する。端面には斜線文が施され、口縁部内面の貼付突帯には施文されない。中期(Ⅲ～Ⅳ期前半)に属すとみられる。９は上面及び側面に顕著な使用痕が残る。上面には幅５mm程度の凹線状の窪みが対角線に平行するように数条認められ、筒状のものを磨いた痕跡のように思われる。側面は平滑面で多数の擦痕が残る。

SK10(図版２・11・21)　４区中央部に位置する。直径50cmの円形を呈し検出面からの深さ17cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質粘土で、遺物は壺(図版11－10)が底からやや浮いた状態で出土した。10は肩部に４条のヘラ描き直線文が施される。中期(Ⅱ期)に属すとみられる。

SK11(図版９・11)　４区南部に位置し、東半は調査区外に続く。上部は長径約3.0mの楕円形、下部は一辺約95cmの隅丸方形となる。検出面からの深さは1.2mを測り、形状から井戸の可能性も考えられる。遺物は底付近から甕(図版11－11・12)、細頸壺が出土した。11はいわゆる「く」字状口縁甕で、最大径は胴部中央付近にあり、口径と最大径がほぼ一致する。12は11と同一個体の胴部以下の部位と思われる。中期(Ⅲ期)に属すとみられる。

SK23(図版２・12・21)　２区南部に位置し、長軸1.90m以上、短軸0.7mの長楕円形を呈す土坑とみられる。埋土は焼土・炭を含む層(約25cm・最上層)とそれらを含まずに地山ブロックを含む層(約15cm・上層)、炭を多く含む層(約10cm・中層)、焼土・炭を多量に含む層(約35cm・下層)に大別される。検出範囲内での深さは最大で85cmを測る。遺物は下層から高杯(図版12－13)、大型の壺(14)が出土した。13は水平口縁の高杯で、口縁断面は方形を呈し端部をつまみ上げる。14は頸部に指頭圧痕突帯、肩部に平行櫛描文と波状櫛描文を交互に配し、その下端部に刺突文を巡らせる。ともに中期(Ⅲ期)に属すとみられる。

SK31(図版８・12・21)　４区南部に位置しSD09を切る。長軸1.60m、短軸1.05mの隅丸長方形を呈す。深さは30cmを測り、底の一段低い範囲から壺(図版12－15)、甕(16)が出土した。15は小型の広口壺で完形のまま出土した。口縁部は短く外反し端部をわずかにつまみ上げる。16は「く」字状口縁の甕で、最大径は胴部上半部にあり、口径と最大径がほぼ一致する。ともに中期(Ⅲ期)に属すとみられる。

SK40(図版４・12)　28区に位置し、SI02-1に切られる。長軸１.0m以上、短軸0.57mで検出面からの深さ13cmを測り、断面形は舟底状を呈す。遺物は甕(図版12－17)が出土した。17は胴部の膨らみが少なく、口縁

部は逆L字状に屈曲し端部は丸みを帯びる。中期(Ⅱ期)に属すとみられる。

(3) 円形周溝墓・周溝墓・溝

3区東部から4区南部、42～49区では周溝墓の可能性のある溝(SD03・08・09・10・16・23・24・28・30)を検出した。ただし、調査範囲の制約から個々の繋がりや全体の形状が不明確であるため、本書ではこれらのうち「C」字状に廻る可能性の高いSD08・09を円形周溝墓1、供献された可能性のある土器を伴出したSD03を周溝墓1とし、また、これらの間に位置するSD10、SD30をそれぞれ周溝墓2、周溝墓3として扱うこととする。

円形周溝墓1(図版8・13・19・21) 4区南部に位置し、東半は調査区外に続く。周溝はSD08とSD09が一対となって「C」字状に廻り、両者の間は陸橋状をなす。SD08はSD28を切り、SD09はSK31に切られる。周溝内墳丘側の下端を基点として計測すると直径は6.7mを測り、円形周溝墓の中では小型に区分される(図11)。SD08は幅0.8～1.5m、検出面からの深さは21～36cmを測り、底が一部深くなる範囲には断面d-d´の3層が堆積していた。断面形は椀状を呈す。SD09は幅0.7～1.25m、深さ19～32cmを測り、断面形は椀状を呈す。SD08・09間の陸橋部の幅は1.7mを測る。埋葬主体は確認されなかったため、東側の調査区外に位置するか、既に削平され消滅していると考えられる。遺物は、SD08から前述の縄文土器深鉢(図版13－23)、弥生土器甕(24)、SD09の上層から甕(25)が出土した。24は如意形口縁をもち、体部に5条のヘラ描直線文を施す。25は甕の底部で、側面の粘土紐を積み上げた後で底部に粘土を詰めて底を作り出していた。ともに中期(Ⅱ期)に属すとみられるが、SD08・09ともに遺物量が少なく時期の決定については保留しておきたい。

周溝墓1(図版9・13・19・21) 3区東部に位置する。SD03は幅0.90～1.00m、検出面からの深さ80cmを測り、断面形は逆台形状を呈す。西端はSD01の手前で収束し、南肩は南東に延び調査区外に続くが、北肩は大きく拡がりながら調査区外に延びていた。埋土の堆積状況は断面f-f´と基本的に変らなかったため、周溝の北肩が拡がるのか、もしくはこの部分に別の溝等が連結するのか、両方の可能性が考えられる。埋葬主体の位置は検出範囲が限られるため不明である。遺物は断面f-f´ラインの東側で、中層(2層)から壺(図版13－19・20)、甕(21・22)等が集積した状態で出土した(図版19)。

19は長頸の広口壺である。頸部に櫛描直線文が微かに残るが施文範囲は不明瞭である。20は長胴の短頸壺で完形の状態で出土した。頸部から胴部上半部に櫛描直接文と刺突文が交互に施文される。胴部に焼成後の穿孔が3箇所認められる。21は外反口縁をもつ甕である。これらは祭祀用に供献された可能性もあるとみられる。時期は中期(Ⅱ期)に属すとみられる。

周溝墓2(図版9・13・19・21) 4区南部に位置する。SD10はSD30、SD15を切り、幅1.45～1.60mで弧状に延び東西の両端は調査区外に続く。検出面からの深さは断面b-b´ライン付近が最も浅く46cmを測り、そこから両側は下降し調査区西壁では96cm、調査区東壁では84cmを計測した。断面形は逆台形状を呈す。埋土の最下層(断面e-e´7層)に灰黄褐色シルト～粘土が堆積していたことから、掘削後一定期間は埋め戻されなかったとみられる。その後、北側から土砂(4・5層)が流入して2/3程度埋まり、最終的には自然堆積(1～3層)により完全に埋没したと考えられる。埋葬主体は位置的にST01が有力視されるが、全容を検出していないこともあり、確定できなかった。遺物は最下層(7層)から甕(図版13－26)を含む土器がまとまって出土した(図版19)。26は「く」字状口縁甕で、最大径は胴部上半部にあたり、口径と最大径がほぼ一致する。中期(Ⅲ期)に属すとみられる。

周溝墓3(図版9・13・19・21) 4区南部に位置する。SD30はSD10に切られ、SD10の北から北西に延び調査区外に続く。SD10と接する部分では幅1.52m、検出面からの深さ73cmを測るが、北西に延びる部分では幅・深さとも規模が小さくなり、断面d-d´ラインでは幅0.52m、深さ46cmとなった。断面d-d´の4・6・7層は自然堆積とみられるが、2・3層は地山ブロックを多く含み、西側から流入するように堆積するため、

本来西側に存在した墳丘の崩落土の可能性があると考えられる。ただし、墳丘盛土は完全に削平を受けているとみられ、全く検出されなかった。これらの状況から埋葬主体は西側の調査区外に位置する可能性が考えられる。遺物は最下層から完形の鉢(図版13－35)が横に置かれた状態で出土した(図版19)。35は口縁部を「く」字状に折り曲げ、端部をわずかにつまみ上げる形態から、中期(Ⅲ期)に属すとみられる。

SD01(図版９・16)　３区東部に位置する。幅1.２m、検出面からの深さ48cmを測り、南北両端は調査区外に延びる。断面形は逆台形状を呈す。出土遺物は少量のため、詳しい時期は不明である。

SD02(図版２・13・16・21)　３区中央部に位置する。幅1.７m、検出面からの深さ57cmを測り、南北両端は調査区外に延びる。断面形は「Ｖ」字状を呈す。遺物は中層から完形の甕（図版13－18）が出土した。18は「く」字状口縁を有す小型の甕で、最大径は胴部上半部にある。

SD16(図版８・18)　４区中央部に位置する。幅0.42～0.68m、検出面からの深さは３～６cmを測り、南東の調査区外に延びる。出土遺物は少量のため、詳しい時期は不明である。

SD19(図版２・３・13・21)　５区の基盤層が北に向かって緩やかに下降する傾斜面に位置する。幅4.２m、検出面からの深さは20～40cmを測り、東西に延び両端は調査区外に続く。埋土(図版３-10層)に多量の中期(Ⅲ期)の土器を含み、最下層の砂質土(11層)から広口壺(図版13－27)が出土した。27は口縁端部を垂下させその端部を上下に肥厚させるもので、端面に綾杉文を施文する。口縁内面には２条の刻み目突帯を貼り付ける。中期(Ⅲ～Ⅳ期)に属すとみられる。

SD23(図版８・18)　46区に位置する。幅0.７3mで南西の調査区外に続く。検出面からの深さは６～13cmを測り、断面形は浅い皿状を呈す。調査区の南西隅ではやや深くなっていた。出土遺物は少量のため、詳しい時期は不明である。

SD24(図版８・13・18)　49区に位置する。幅0.89mで弧を描きながら延び、北西及び南東の両端は調査区外に続く。検出面からの深さは41cmを測り、断面形は逆台形状を呈す。遺物は上層から壺の底部(図版13－28)、鉢又は台付小型壺の底部(29)が出土した。また、地元産ではないとみられる黒褐色から褐色を呈し胎土に多量の雲母を含む土器小片が出土した。遺構の形状及び位置関係からSD23に連続するものとし、直径5.８mの円形周溝墓と想定することもできるが、48区でこれに連続する溝を確認できなかったことから性格を特定することは保留しておく。

SD25(図版２・13・18・21)　幅1.12mで東西に直線的に延び両端は調査区外に続く。検出面からの深さは北西隅が7cmと浅く、中程から東端にかけて24cmと深くなっていた。底から高杯(図版13－30)、広口壺(31)等が集積した状態で出土した(図版18)。30は口縁部に向かって緩やかに湾曲して立ち上がる椀形高杯で、口縁部外面に４条の凹線文を施す。31は口縁部が大きく外反し下端部は肥厚する。頸部に指頭圧痕突帯を巡らす。中期(Ⅳ期前半)に属すとみられる。

SD26(図版８・18)　42区に位置する。幅0.46mで南西から北東に延び、44区でSD27と連結することが土層断面で確認できた。南西端は調査区外に延びる。検出面からの深さは７cmを測り断面形は皿状を呈す。出土遺物は少量のため、詳しい時期は不明である。

SD27(図版８・13・18)　42区に位置する。幅1.38mで南北に延び両端は調査区外に続く。検出面からの深さは45cmを測り、断面形は逆台形を呈す。42区西壁(断面b-b´)での土層の堆積状況からSD26とは同一の埋土で連続することが確認された。このことからSD26とは同時期に併存していたと考えられる。遺物は断面c-c´の１層から甕(図版13－32)、中層から甕(33)、４・５層から壺(34)が出土した。32は甕の底部である。胎土が比較的精緻であり中期(Ⅲ期)の可能性がある。33は外反口縁を有す甕で、口縁部に刻み目、胴部に少なくとも２条のヘラ描き直線文が施される。34は直口壺の可能性がある。口縁部外面に断面三角形の貼付突帯を巡らし刻み目を付けている。頸部に１条の直線文、胴頸部に櫛描直線文が施される。33・34は中期(Ⅱ期)に属すとみられる。

SD28(図版８・18)　４区中央部に位置しSD08に切られる。幅1.1mでやや弧を描きながら北東の調査区外に延びる。検出面からの深さは13cmを測り断面形は浅い皿状を呈す。出土遺物は少量のため、詳しい時期は不明である。形状及び位置関係からSD16と一対になるものと捉え、直径9.7mの円形周溝墓を想定すると、ST05が中央に位置するため、これを埋葬主体とみることもできる。しかし、45・46区では溝等を確認できなかったことから円形周溝墓と断定することを保留した。

SD32・SK05(図版２・14)　１区東端部から５区南端部にかけて位置する。幅1.8mで弧状に湾曲し北東・南西の両端は調査区外に延びる。肥溜め等の攪乱により部分的に破壊されていたが、検出面からの深さは15cmを測り、断面形は皿状を呈す。底の一部で焼土を確認した。SK05はこの下層で検出したがSD32と埋土が酷似しており、溝の一部となる可能性がある。遺物はSD32から壺(図版14－36～38)、SK05から甕(39)が出土した。いずれも中期(Ⅱ期)に属すとみられる。

(４)木棺墓

ST01(図版９・10・20)　４区南部に位置しSD15を切る。北東端の一部が調査区外に続くが、ほぼ全容を検出できた。墓坑は長軸2.20m、短軸1.07mの隅丸長方形を呈す。検出面から棺底までの深さは53cmを測り、地山掘削土で埋め戻されていた。土層断面(図版10)の８層は蓋板材の痕跡とみられ、木質が一部遺存していた。15層は底板材の痕跡とみられる。この下部で小口穴(22～25層)、南東隅及び北西隅で側板の痕跡とみられる小溝を検出した。小口穴は幅29～51cm、深さ約18cmを測り、内部に小口板の一部及びその痕跡が残っていた。小口板は全容を検出することができた南側で長辺58cm、幅6cmを測り、北側でも同様の規模と思われる。南西の側板は小口穴より外側に延びていたが、北西の側板は小口穴付近で止まっていた。小口板及び側板の痕跡からみて、木棺内の法量は長辺約1.50m、幅約0.49mと想定される。これらの状況から、棺材を固定する順序として、小口板・側板の立てた後に底板を設置したと考えられる。棺内外からは遺物は出土しなかった。

ST02(図版９・10・20)　４区南部に位置する。方向軸はST01に近い。墓坑は長軸1.88m、短軸0.90mの長方形を呈す。木棺の検出範囲は3/4程度に留まった。検出面から棺底までの深さは20cmを測る。検出した範囲では小口穴は確認されなかった。土層断面(図版10)の４層は側板、４´層は底板材の痕跡とみられる。これらの状況から小口板及び側板を立てた後、底板を嵌めたと考えられる。棺内の法量は長辺1.16m以上、幅約0.35mと想定される。遺物は出土しなかった。

ST03(図版９・10・20)　４区南部に位置し、方向軸はST02に比べると東に振る。墓坑は長軸1.82m、短軸0.80mの長方形を呈す。検出面から棺底までの深さは22cmを測る。東西の両端部に明確な小口穴は検出されなかったが、小口板の痕跡を西端で１箇所(小口板a)、東端で２箇所(小口板b・c)確認することができた(図版10)。東端では、当初の小口板bの上に底板の痕跡(９・10層上面)が延びることが平面及び断面で観察された。小口板cは断面から底板痕に後出する可能性がある。側板の痕跡は10層(底板の痕跡)を挟む形で認められた。これらの状況から小口板bの埋設後に底板を置き、小口板cは小口板bより約10cm内側の位置に立て、おそらくこれと同時に小口板a及び側板を底板に外接させて固定したと考えられる。このことから、棺内の法量は長辺約1.19m(小口板a－cの内法)、幅約0.45mと想定される。棺内外から遺物は出土しなかった。

ST04(図版８・10・20)　４区南部に位置する。方向軸は正方位の南北方向に近い。墓坑は長軸1.25m、短軸0.59mの長方形を呈す。検出面から棺底までの深さは14cmを測る。土層断面(図版10)から４層は底板材、３層は小口板の痕跡とみられ、棺内の法量は長辺約0.89m、幅約0.36mと想定される。小口穴は検出されなかった。側板痕跡付近から径約10～17cmの角礫が出土したが、棺材の腐朽に伴い棺外から流入したものとみられる。棺内外から遺物は出土しなかった。

ST05(図版８・10・20)　43区に位置しSK43を切る。方向軸は正方位の東西方向に近い。墓坑は検出した範

囲で長軸1.20m、短軸0.88mを測り、形状は長方形を呈す可能性がある。検出面から墓坑床面までの深さは8cmを測る。床面では棺材の可能性のある褐灰色粘土の小溝を検出した。小溝のうち墓坑の長辺に平行するものは側板の痕跡とみられるが、検出範囲の中央部で検出した短辺約40cm、長辺50cm以上を測る「コ」の字状の痕跡については、全容を確認できていないことや墓坑の軸線と一致しないこともあり、本遺構に伴うものかを含めて不明である。西端部で小口穴を検出した。長さ54cm、幅31cm、深さ37cmを測る。小口穴の上層(図版10－2・3層)では径15cm程度の角礫を確認したが、これらは棺外の裏込めに含まれていたものが棺材の腐朽に伴い流入したものと推測される。棺内外から遺物は出土しなかった。

ST06(図版9・10・20)　3区東部に位置する。方向軸はST01に近い。墓坑は長軸0.87m、短軸0.40mの長方形を呈し、検出面から墓坑床面までの深さは4cmを測る。南端部で長さ40cm、幅26cm、深さ16cmを測る小口穴を検出した。遺物は出土しなかった。

ST07(図版2・10・20)　39区に位置し、軸線は正方位の東西方向から少し南に振る。墓坑は長軸0.8m、短軸0.56mの小判形を呈し、検出面から墓坑床面までの深さは33cmを測る。東西両端部で小口穴を検出した。小口穴は長さ30～36cm、幅13～15cm、深さ11～13cmを測る。遺物は出土しなかった。

3．古墳時代以降

古墳時代以降の遺構・遺物は極めて少なかった。**SK15・SK16・SK18・SD11**からは須恵器の細片が出土している。**SP105-137-136-104-133-130**は中世の柱穴列とみられ、方向軸はN-13.5°-Eをとる。

註5　調査については、兵庫県まちづくり技術センターの大木朋也氏によりご教示を得た。

註6　弥生土器の編年については、以下の文献を参考にした。
長友朋子・田中元浩「西播磨地方の土器編年」『弥生土器集成と編年－播磨編－』大手前大学史学研究所 2007年
寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社 1990年
正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 1992年

註7　ｲﾅｶ土坑とは、弥生時代中期から後期にかけて、現在の兵庫県南西部を中心に分布する竪穴建物跡の燃焼施設の名称である。本来ならば、「｜○型中央土坑」の名称を使用すべきであるが、記述の煩雑さを避けるため、本書では「ｲﾅｶ土坑」と呼称し、「｜土坑」を「ｲﾙ土坑」、「○土坑」を「ﾛﾙ土坑」と呼び替えて使用する。

註8　兵庫県教育委員会『清水遺跡』兵庫県文化財調査報告第183冊 1999年

註9　兵庫県教育委員会『六角遺跡』兵庫県文化財調査報告第134冊 1994年

註10　和久遺跡(弥生時代中期から庄内併行期)のｲﾅｶ土坑の分析・分類によるとＢ１類またはＢ２類に該当する(小柴治子「｜○(いちまる)型中央土坑」の変遷－和久遺跡検出資料の検討－」『縄文化財学論集』文化財学論集刊行会 2003年)。

註11　岸本一宏「周溝墓を中心とした播磨地域の様相」『弥生墓からみた播磨』第9回播磨考古学研究集会実行委員会 2009年。以下、円形周溝墓を仮定した意図の計測は、この方法に基づいて行った。

第３章　総括

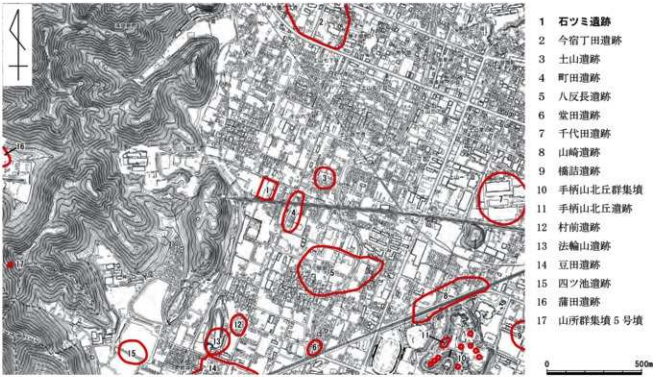
今回の調査では弥生時代中期(Ⅱ～Ⅳ期前半)に属す竪穴建物跡、土坑、円形周溝墓、周溝墓、溝等の遺構を検出し、集落遺跡としての石ツミ遺跡の一端を把握することができた。

このうち周溝墓はⅡ～Ⅲ期にわたり、この期間に継続して造墓が行われたと考えられる(註12)。竪穴建物跡はいずれも出土遺物が少量であったため、時期を決定することは難しいが、少なくともSI02-1・2は出土遺物や遺構の切合い等からⅢ～Ⅳ期前半に帰属する可能性がある。検出された地点に着目すると、墓が調査地の南東部に位置する一方で、竪穴建物跡は中央部から西部にかけて設けられており、両者の分布範囲は明確に分かれる傾向が認められた。このことから、時期的に完全には併存しないものの、概ね墓域、居住域の空間として意識されていた可能性があると考えられる。

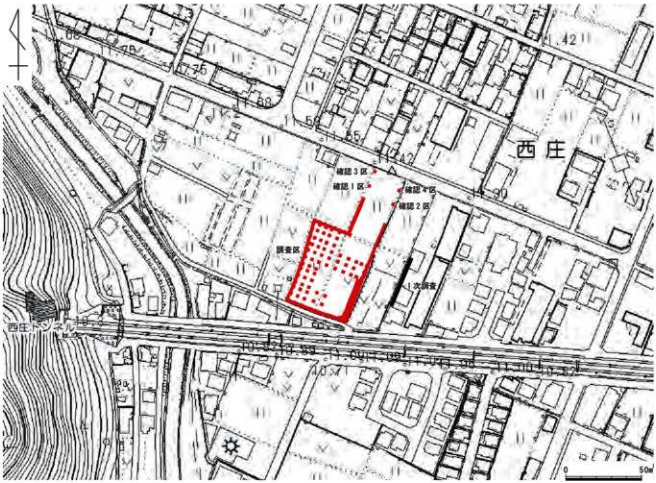
なお、木棺墓からは副葬品等の遺物が全く出土せず、時期を特定できなかったが、小口穴の有無によって少なくとも２型式は存在することが明らかになった。この点については、同一墓地の中に両型式の木棺が混在している例がかなりある(註13)とされ、本遺跡も例外ではないと考えられる。

註12　荒木幸治「統計的にみた播磨の弥生墓」『弥生墓からみた播磨』第9回播磨考古学研究集会実行委員会 2009年によると、播磨における区画墓は、方形周溝墓及び円形周溝墓ともにⅡ期に東播磨側から導入され、方形周溝墓は前期には加古川中下流域まで、Ⅳ期には揖保川中下流域まで、Ⅴ期以降には千種川中流域までと、西に拡散していくのに対し、円形周溝墓は、本来は「西方からの情報」でありながら、Ⅳ期には加古川から揖保川中下流域に普及し、Ⅴ期以降になると主に沿岸部を中心として播磨全域に分布すると分析され、「実態は、単純な伝播モデルによらない、より複雑な情報伝達の評価が必要」との認識を示している。今回の調査結果は、既往研究に新たな資料を提供する形になったと思われる。

註13　福永伸哉「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究 第32巻第１号』考古学研究会 1985年

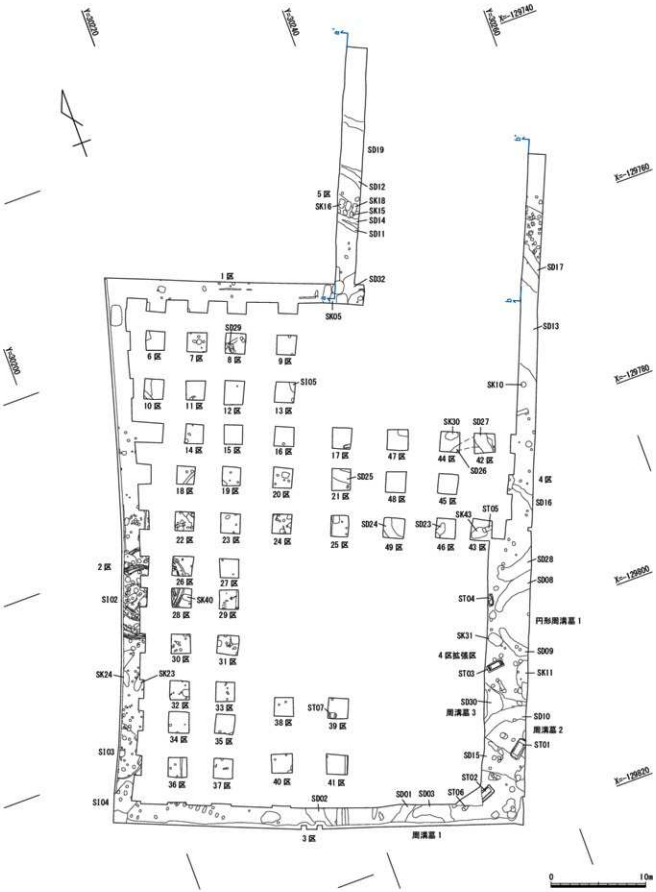


1 石ツミ遺跡と周辺遺跡

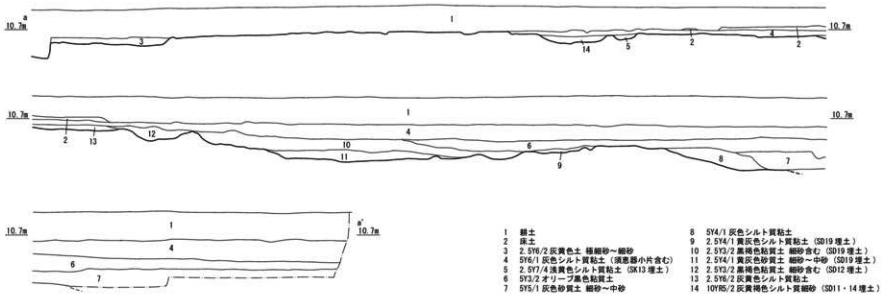


2 調査区・既往調査位置図（S=1：2,500）※確認1～4区は確認調査の調査区

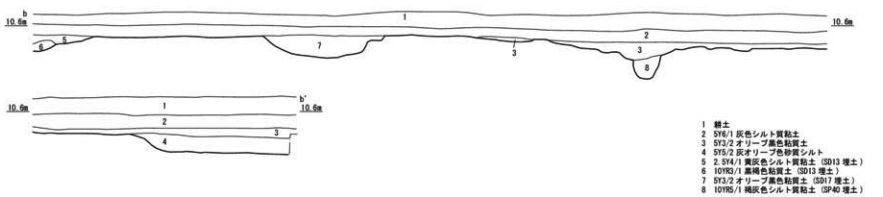
図版 2



遺構全体図（S=1:400）

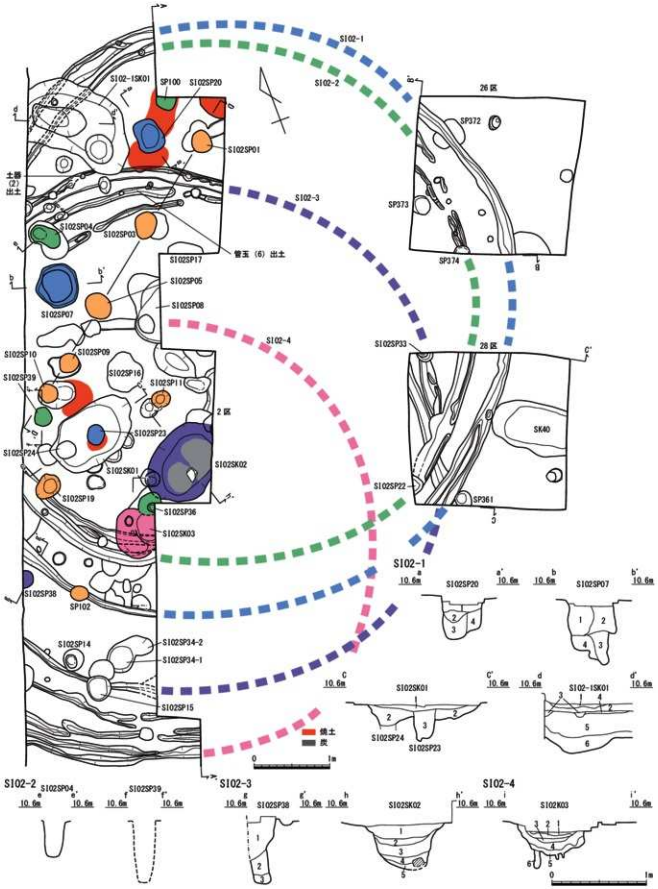


1 5区西壁（a-a'）土層断面図（S=1：50）



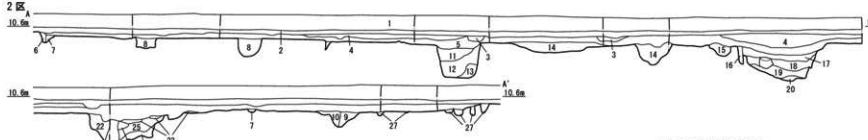
2 4区西壁（b-b'）土層断面図（S=1：50）

図版3



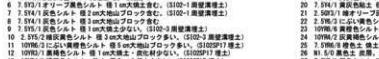
S102平面図（S=1：50）　S102関連遺構断面図（S=1：40）※断面図の土層名は図版5参照

2 区



1 耕土
2 2.5Y5/2暗灰黄色土 稀細砂～細砂 旧耕土
3 10YR6/2灰黄褐色シルト質粘土
4 10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土 炭・焼土少ない
5 10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土 炭・焼土多い
6 7.5YR3/1オリーブ黒色シルト 径1cm大焼土含む。(S102-1 周壁溝埋土)
7 7.5YR4/1灰色シルト 径2cm大地山ブロック含む。(S102-1 周壁溝埋土)
8 7.5YR4/1灰色シルト 径3cm大地山ブロック含む
9 7.5YR5/1灰色シルト 径1cm大焼土ごく少ない。(S102-3 周壁溝埋土)
10 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 径3cm大地山ブロック多い。(S102-3 周壁溝埋土)
11 10YR6/3にぶい黄橙色シルト 径5cm大地山ブロック多い。(S102SP17 埋土)
12 10YR3/1黒褐色シルト 径1cm大焼土・炭に材分ない。(S102SP17 埋土)
13 10YR4/1褐灰色シルト～粘土 径2cm大焼土少ない。(S102SP17 埋土)
14 10YR6/6黄褐色シルト質粘土 炭黄褐色土ブロック含む
15 7.5YR4/1灰色シルト 径2cm大地山ブロック多い
16 2.5Y5/2暗灰黄色粘土
17 7.5YR4/1黄灰色シルト 18層との層界に炭層。(S102SK02 埋土)
18 7.5YR4/1黄灰色シルト (S102SK02 埋土)
19 7.5YR4/1黄灰色シルト 径0.5cm大炭化材・焼土多い。(S102SK02 埋土)
20 7.5YR4/1黄灰色粘土 径2cm大炭化材多い。(S102SK02 埋土)
21 2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト～粘土 径1cm大地山ブロック・焼土多い。(S102SP36 埋土)
22 2.5Y6/3にぶい黄色シルト 地山ブロック多い。(S102SP36 埋土)
23 10YR6/6黄橙色シルト質粘土 炭黄褐色土ブロック含む。(S102-2 周壁溝埋土)
24 10YR4/2灰黄褐色シルト。(S102SK03 埋土)
25 7.5YR6/8橙色土 焼土・炭多量。(S102SK03 埋土)
26 N1.5/0黒色土 炭層。地山ブロック少ない。(S102SK03 埋土)
27 7.5YR5/1灰色シルト 焼土少ない。(S102-4 周壁溝埋土)

26 区



1 耕土
2 10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土 炭・焼土多い
3 7.5YR4/2灰褐色シルト質粘土 地山ブロック含む。(粘床)
4 7.5YR4/1灰色シルト 径2cm大地山ブロック含む
5 7.5YR4/1灰色シルト (S102-1 周壁溝埋土 焼土・炭が入らない (S102-1 周壁溝埋土)
6 7.5YR4/1灰色シルト
7 7.5YR4/2灰褐色シルト質粘土 (S102-2 周壁溝埋土)
8 7.5YR4/1灰色シルト 炭・焼土少ない

28 区

1 耕土
2 10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土 炭・焼土多い
3 7.5YR4/2灰褐色シルト質粘土 地山ブロック含む。焼土が入らない。(粘床)
4 7.5YR3/1オリーブ黒色シルト 径1cm大焼土含む (S102-1 周壁溝埋土)
5 7.5YR4/1灰色シルト 径2cm大地山ブロック含む (S102-1 周壁溝埋土)
6 10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土 焼土少ない (S102-1 周壁溝埋土)
7 7.5YR4/2灰褐色シルト質粘土 炭黄褐色土ブロック含む
8 7.5YR3/1オリーブ黒色シルト 地山ブロック多い
9 7.5YR4/1灰色シルト 焼土・炭が入らない (S102SP22・SP361 埋土)
10 7.5YR4/1灰色シルト 地山ブロック多い
11 7.5YR3/1オリーブ黒色シルト 焼土少ない (S102SP33 埋土)
12 7.5YR4/2灰褐色シルト質粘土 地山ブロック多い (S102SP33 埋土)
13 10YR6/6～7/4明黄褐～にぶい黄橙色シルト 砂質に、炭黄褐色土ブロック微量
14 10YR6/6～7/4明黄褐～にぶい黄橙色シルト 砂質に、炭黄褐色土ブロック微量
B 2.5Y4/1～4/2黄灰～暗炭黄色砂礫
C 10YR5/4～6/6にぶい黄橙～明黄褐色シルト 砂質にる

柱穴列 (S102SP01-S102SP10)

1 10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土 地山ブロック少ない
2 10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土 地山ブロック多い
3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト質粘土 地山ブロック多い
4 10YR5/6黄橙色シルト質粘土 地山砂床 炭黄褐色土ブロック含む

S102・柱穴列 (S102SP01-S102SP10)断面図 (S=1：40)

図版4 S104 関連遺構土層名

S102SP20
1 10YR3/2黒褐色シルト質粘土 炭・焼土多量混じる
2 10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土
3 10YR4/2～4/1灰黄褐～褐灰色シルト
4 10YR3/2～4/2黒褐～灰黄褐色シルト質粘土 砂質じる。地山ブロック多い

S102SP07
1 10YR3/2～4/2黒褐～灰黄褐色シルト質粘土 砂質じる。地山ブロック多い
2 10YR3/2～4/2黒褐～灰黄褐色シルト質粘土 地山ブロック多い
3 10YR3/2～4/1シルト質粘土 地山ブロック微量。炭少ない
4 10YR3/2～4/2黒褐～灰黄褐色シルト質粘土

S102SK01
1 10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土 焼土・炭含む
2 10YR4/3にぶい黄褐色シルト質粘土 焼土・炭・地山ブロック含む
3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト質粘土 細砂含む (S102SP23 埋土)

S102-19N01
1 10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土 炭・焼土少ない
2 10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土 炭・焼土多い
3 10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土 炭・焼土少ない。(S102-1・S102-2の周壁溝埋土)
4 10YR3/1黒褐色シルト質粘土 地山ブロック混じる
5 10YR3/1黒褐色シルト質粘土 地山ブロック含む
6 10YR6/6黄橙色シルト質粘土 黒褐色シルト質粘土混じる

S102SP38
1 10YR4/2灰黄褐色シルト 径1cm地山ブロック少ない。比較的均質
2 10YR4/2灰黄褐色シルト 地山ブロック多い
3 2.5Y4/1黄灰色粘土

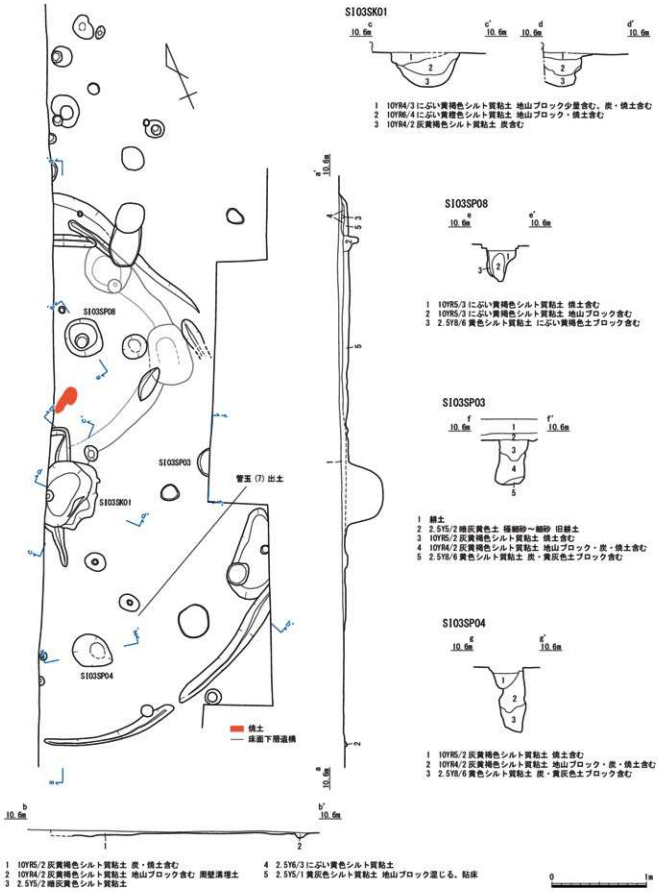
S102SK02
1 10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土 焼土・炭含む。2層との層界に炭層。S102 埋土
2 7.5Y4/1灰色シルト
3 7.5Y4/1灰色シルト 径0.5cm大炭化材・焼土多い
4 7.5Y4/1灰色粘土
5 7.5Y4/1灰色粘土 径3cm大炭化材多い

S102SK03
1 10YR4/1～4/2褐灰色～灰黄褐色シルト
2 10YR6/6黄橙色シルト質粘土 地山由来土
3 10YR4/2灰黄褐色シルト
4 7.5YR6/8橙色土 焼土・炭多量
5 N1.5/0黒色土 炭層 地山ブロック少ない
6 N3/0暗灰色土 地山ブロック含む。(ピット)

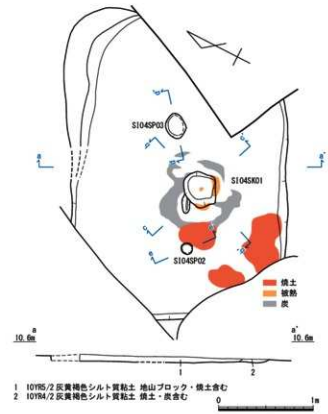
0 1m

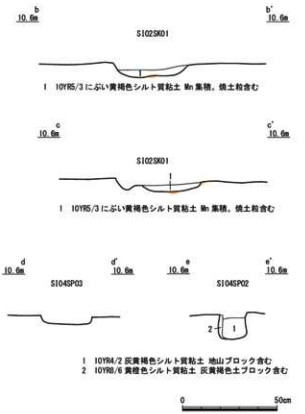
図版5

図版 6

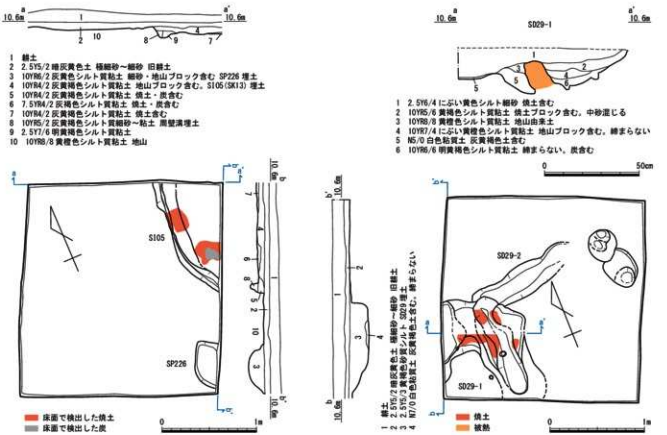


S103平面・断面図 (S=1：40)

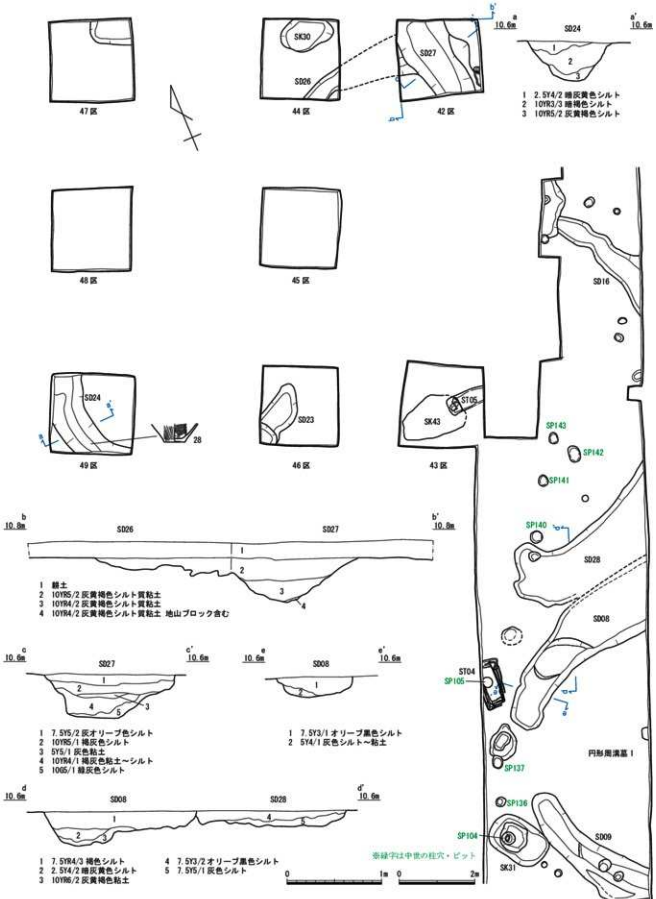




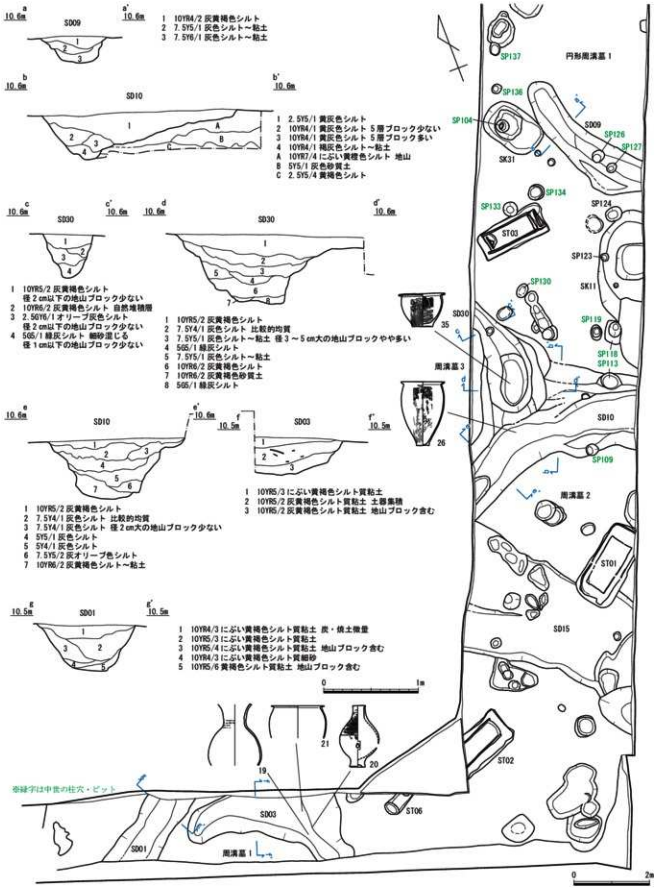
1 S104平面・断面図（S=1：40） S104関連遺構断面図（S=1：20）



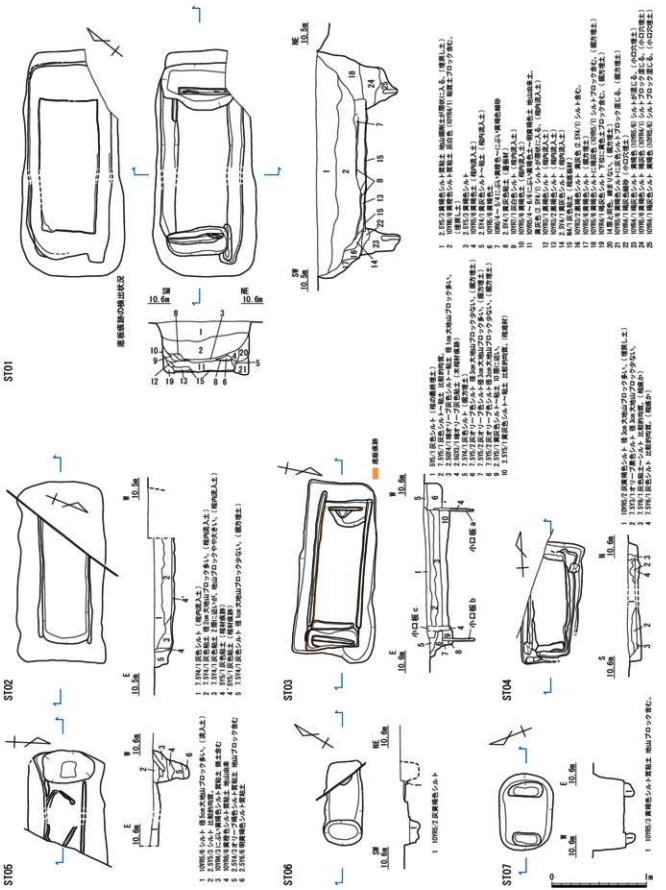
2 13区平面・断面図（S=1：40） 3 8区平面・断面図（S=1：40） SD29-1断面図（S=1:20）



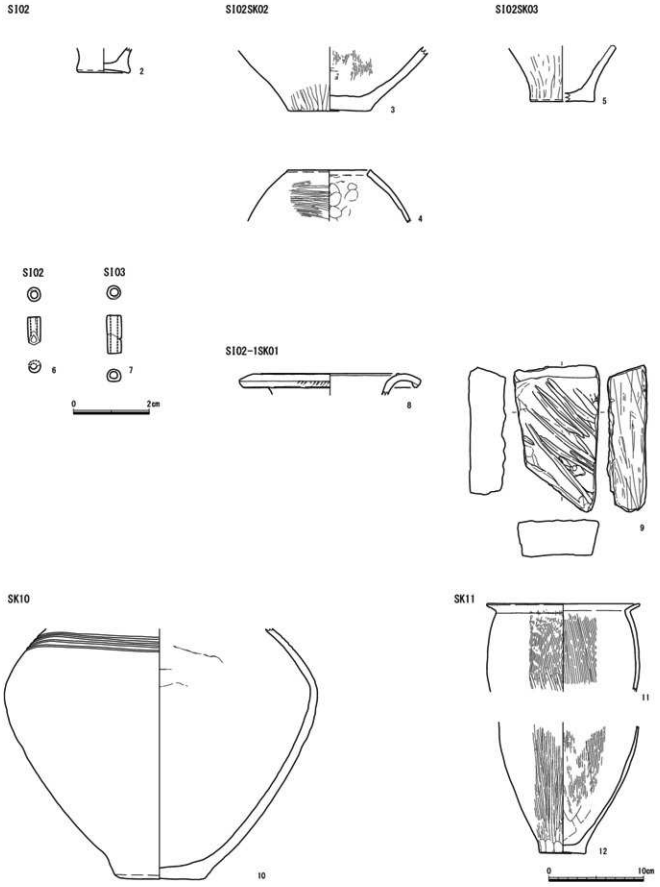
4区拡張区①・42～49区平面図（S=1:100） SD08・SD26・SD27・SD28断面図（S=1：40）



4区拡張区平面図②（S=1:100） SD01・SD03・SD09・SD10・SD30断面図（S=1：40）



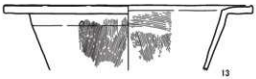
ST01～ST07平面・断面図 (S=1：40)

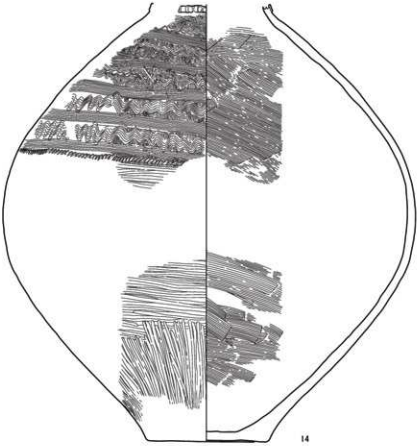

S102
2
S102SK02
2
3
4
S102SK03
5
S102
S103
6
7
0
2cm
S102-1SK01
8
9
SK10
10
SK11
11
12
0
10cm

遺物実測図（2～12）

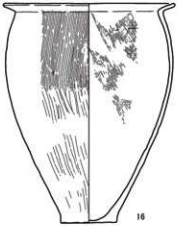
図版 12

SK23

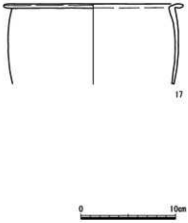




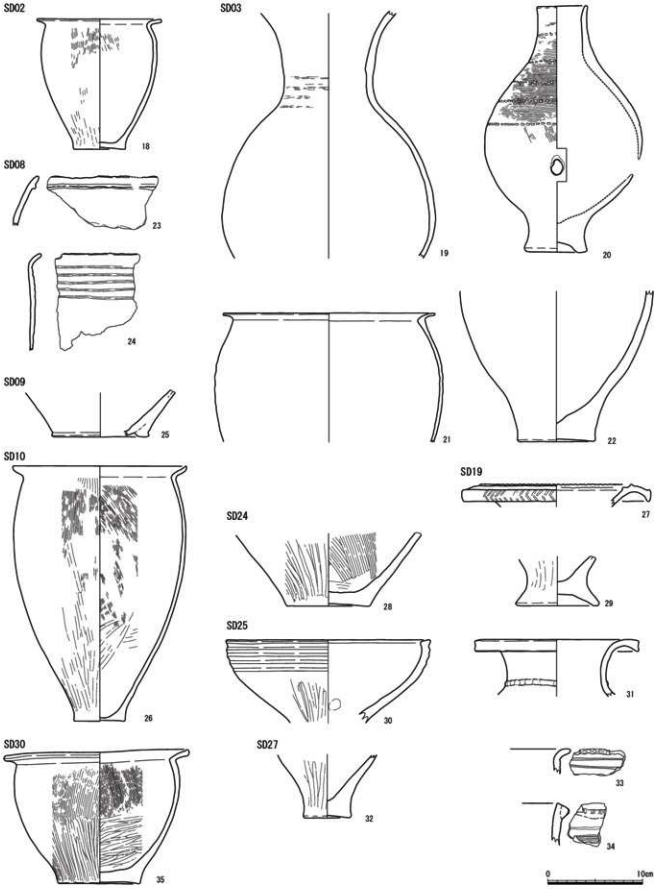
SK31



SK40



遺物実測図（13～17）


SD02
18
SD03
19
20
SD08
23
24
21
22
SD09
25
SD10
26
SD19
27
SD24
28
29
SD25
30
31
SD30
35
SD27
32
33
34
0
10cm

遺物実測図（18～35）

図版 14

遺物実測図（36～39）

番号	遺構・層位	種別	器種	口径(長さ)	器高(幅)	最大径	底径(厚み)	色調	残存状況	成形・調整等
1	16区基盤層直上	縄文土器	深鉢	(32.2)	残 10.0			灰黄褐10YR5/2	口縁小片	外面ミガキ
2	SI02	弥生土器	甕		残 2.6		(5.6)	黄灰2.5Y6/1	底部完存	磨滅が著しく調整不明
3	SI02SK02	弥生土器	壺		残 6.8		8.5	にぶい黄橙10YR7/2	底部完存	体部下半縦ミガキ
4	SI02SK02	弥生土器	壺	(8.8)	残 5.6			明褐灰7.5YR7/2	口縁1/6	体部横ミガキ
5	SI02SK03	弥生土器	甕		残 5.9		6.6	浅黄橙10YR8/3	底部1/4	体部下半縦ミガキ
6	SI02-1	石製品	管玉	(0.7)	0.3			暗緑灰7.5GY4/1	一部欠損	碧玉製管玉
7	SI03	石製品	管玉	1.0	0.3			暗オリーブ灰2.5GY3/1	一部欠損	碧玉製管玉
8	SI02-1SK01	弥生土器	壺	(14.2)	残 2.2	(19.2)		にぶい黄橙10YR7/3	口縁1/10	口縁端面に刻み目文
9	SI02-1SK01	石製品	砥石	9.0	15.5		3.9	灰色5Y6/1	完形	上面に筒状のものを磨いた数条の痕跡
10	SK10	弥生土器	甕		残 26.6		8.7	にぶい黄橙10YR7/4	体部1/2	磨滅が著しく調整不明
11	SK11	弥生土器	甕	(15.9)	残 9.3			にぶい黄橙10YR6/3	口縁1/6	体部上半縦ハケメ。体部下半縦ミガキ
12	SK11	弥生土器	甕		残 13.9		4.6	灰黄褐10YR5/2	底部完存	体部下半縦ミガキ
13	SK23	弥生土器	高杯	(26.1)	残 6.8			灰黄褐10YR5/2	口縁1/5	体部縦ハケメ
14	SK23	弥生土器	壺		残 46.3	(43.7)	12.2	にぶい黄橙10YR7/4	体部1/6、底部1/2	胴部に胴部圧痕突帯、肩部に平行櫛描文と波状文
15	SK31	弥生土器	壺	6.3	13.7	12.7	5.2	にぶい黄橙10YR6/4	完形	体部上半縦ミガキ。体部下半縦ミガキ
16	SK31	弥生土器	甕	(17.8)	23.3		5.9	にぶい橙7.5YR6/4	口縁1/2、底部完存	体部上半縦ハケメ。体部下半縦ミガキ
17	SK40	弥生土器	甕	(19.0)	残 8.5			灰白10YR8/2	頸部1/5	磨滅が著しく調整不明
18	SD02	弥生土器	甕	13.0	13.8		5.4	灰黄2.5Y6/2	完形	体部上3/4縦ハケメ。体部下1/4縦ミガキ
19	SD03	弥生土器	壺		残 25.9	(22.6)		灰白10YR8/2	体部1/4	頸部に直線文
20	SD03	弥生土器	壺	5.1	26.1	16.7	6.4	にぶい橙7.5YR6/4	完形	体部に穿孔3箇所。直線文と列点文
21	SD03	弥生土器	甕	(22.2)	残 13.6	(24.1)		橙7.5YR7/6	口縁1/3	磨滅が著しく調整不明
22	SD03	弥生土器	甕		残 15.9		7.8	灰白10YR8/2	底部完存	磨滅が著しく調整不明
23	SD08	縄文土器	深鉢		残 5.2			暗灰黄2.5Y4/2	口縁1/10	磨滅が著しく調整不明
24	SD08	弥生土器	甕		残 10.2			浅黄橙7.5YR8/3	口縁1/10	ヘラ描沈線文5条
25	SD09上層	弥生土器	甕		残 5.0		(9.7)	にぶい黄橙10YR6/4	底部1/6	磨滅が著しく調整不明
26	SD10下層	弥生土器	甕	(18.3)	27.0		5.2	浅黄橙10YR8/4	ほぼ完形	体部上半縦ハケメ。体部下半縦ミガキ
27	SD19下層	弥生土器	壺	(16.0)	残 2.4	(20.0)		淡黄2.5Y8/3	口縁1/5	口縁端面に綾杉文、上面に刻み目凸帯
28	SD24	弥生土器	壺		残 7.7		8.8	灰黄褐10YR5/2	底部完存	体部下半縦ミガキ
29	SD24	弥生土器	鉢		残 5.2		8.4	灰白10YR8/1	底部3/4	体部下半縦ミガキ
30	SD25	弥生土器	高杯	(21.4)	残 8.8			橙7.5YR7/4	口縁1/2	凹線4条。杯部下半縦ミガキ
31	SD25	弥生土器	壺	(15.8)	残 6.0	(17.3)		浅黄橙10YR8/3	口縁1/4	頸部に指頭圧痕凸帯
32	SD27	弥生土器	甕		残 6.7		(4.9)	灰黄2.5Y7/2	底部1/4	体部下半縦ミガキ
33	SD27	弥生土器	甕		残 2.8			浅黄橙10YR8/3	口縁1/10	口縁端部に刻み目、ヘラ描沈線文2条
34	SD27	弥生土器	壺		残 4.5			黄灰2.5Y6/1	口縁細片	貼付凸帯1条、ヘラ描沈線文1条
35	SD30	弥生土器	鉢	19.2	14.2		8.5	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部5%、体部完存	体部上半縦ハケメ。体部下半縦ミガキ
36	SD32	弥生土器	壺		残 2.2			橙5YR7/6	口縁細片	口縁端面に刻み目文
37	SD32	弥生土器	壺		残 4.7			浅黄橙10YR8/3	口縁1/7	直線文と波状文
38	SD32	弥生土器	壺		残 7.3			浅黄橙10YR8/3	口縁細片	波状文と直線文
39	SK05	弥生土器	壺		残 7.1		5.6	灰白2.5Y8/2	底部2/3	体部下半縦ハケメ

※法量の（）内の数値は復元値を示す。

遺物観察表

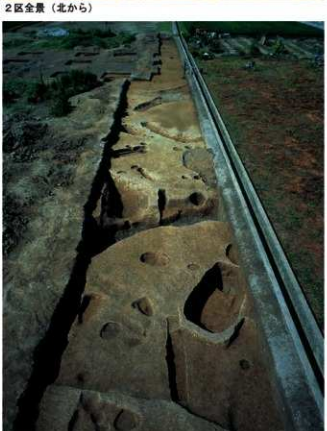
調査地遠景（北東から）

調査地北西部全景（東から）

遺構写真（1）

2区全景（北から）

3区全景（東から）



4区全景（南から）

4区北部全景（南から）

遺構写真（2）

S102-1 炭化材検出状況

S102SK02（南西から）

S102SK03（西から）

S102（北東から）

遺構写真（3）

S103（南から）

S104（北東から）

SD29（北から）

SD16・SD28（北から）

SD24（南東から）

SD23（北東から）

SD25 弥生土器出土状況（西から）

SD26・SD27（南東から）

遺構写真（4）

円形周溝墓 1（南西から）

周溝墓 1（西から）

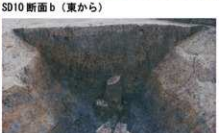
周溝墓 2・3・ST01（北東から）

SD03 弥生土器（19～21）出土状況（南西から）

SD10 弥生土器出土状況（東から）

SD10 断面 b（東から）

SD30 断面 d（北から）



SD10 断面 e（北東から）

SD30 弥生土器（35）出土状況（南から）

遺構写真（5）

ST01 小口穴半裁状況（南西から）

ST02（東から）

ST01（南西から）

ST04 木棺痕跡検出状況（南から）

ST03（東から）

ST05（東から）

ST06（南東から）

ST07（北東から）

出土遺物写真

報告書抄録

ふりがな	いしつみいせきだいにじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	石ツミ遺跡第２次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第64集
編著者名	南　憲和
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地１
発行年月日	平成30年（2018年）３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	664 ㎡
石ツミ遺跡（いしつみいせき）	姫路市西庄（ひめじしさいしょう）367番１他	28201	020946	34°49′46″	134°39′50″	2017.4.25～2017.7.31	調査原因	建築工事
							調査番号	20170037

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
石ツミ遺跡	集落跡	縄文時代		縄文土器深鉢
		弥生時代	竪穴建物跡・土坑 円形周溝墓・周溝墓 溝・木棺墓	弥生土器壺・甕・鉢・高杯 石製品（管玉・砥石）
		中　世	柱穴	

要約	石ツミは弥生時代中期を中心とする集落遺跡であることが判明した。 調査地の南東部に円形周溝墓を含む墓が位置し、中央部から西部にかけて竪穴建物跡が分布する状況が認められ、両者は時期的に完全には併存しないものの、概ね墓域、居住域として意識されていた可能性があると考えられる。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第64集

石ツミ遺跡第２次発掘調査報告書

平成30年（2018年）３月31日　発行

編　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地１
TEL（079）252-3950

発　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目１番地

印刷・製本　株式会社デイリー印刷
兵庫県姫路市飾東町庄57-2